豪元捕虜との市民交流会 2013

10 月 2 日午後 2 時から、大阪経済法科大学麻布台セミナーハウスを会場に、豪元捕虜＆家族との交流会が開催されました。会場には泰緬鉄道建設時に陸軍報道班だった故泉信次郎氏が現地で撮りためた写真（42 年末～43 年開通式まで）が展示され、開会前から一般参加者は興味深そうに見入っていました。

参加者はゲストを含め約 50 人。質疑応答では鋭い質問も多く出され、実り多い交流会となりました。

司会：小宮まゆみ＆田村佳子（POW 研究会）

通訳：北原春美（サイマルインターナショナル）

資料：元捕虜の方々がいた収容所については以下の資料 PDF をご覧下さい。

大浜収容所、善通寺収容所、花岡収容所

1．**始めの言葉**：笹本妙子（元捕虜・家族と交流する会共同代表、POW 研究会事務局長）

2．**泰緬鉄道写真スライドショー**

泉信次郎氏撮影の写真をプロジェクターで映写し、POW 研究会の西里扶甬子とデヴィッド・モートンが日本語と英語で解説しました。

泉信次郎氏の泰緬鉄道写真展示

3．**藤田幸久参議院議員（元捕虜招聘事業の実現に尽力）の挨拶**

現・財務大臣の麻生太郎氏の父が経営する麻生炭鉱では、戦中捕虜を使役していたが、麻生首相ははじめ捕虜使役の事実を認めなかった。麻生炭鉱で使役された豪元捕虜と英捕虜の息子が来日し、使役された事実を訴え、飯塚市を訪問して当時の小学生だった人たちと感動的な再会があった。日本政府は、英、蘭、豪の元捕虜は招いたが、米元捕虜は招いていなかったが、我々の働きかけで４年前から米と豪の元捕虜を招聘するようになった。今後もこうした交流を続けたい。

４．元捕虜の皆さんのお話、付添のご家族のお話

■チャールズ・アーサー・エドワーズ（Mr. Charles Arthur Edwards）　95 歳

私が捕虜になったのはムアール川の戦闘の際だった。日本軍はムアール川を渡って豪軍と対峙した。日本軍は包囲作戦に慣れており、大量の武器や戦車・飛行機などがあったが、我々は武器が不足していた。20km は推し戻された。チャールズ・アンダーソン中佐（註：オーストラリア第 19 大隊長）が指揮をしていた。パリットスローン（マレー半島ジョホール州）の大きな川の橋のところで捕虜になった。日本軍は、負傷してここで置き去りにされた豪兵とインド兵を残虐に焼き殺した。11 名しか生き残れなかった。

我々はクアラルンプールのプドゥ刑務所に収容された。20m×20m ぐらいの所に 600 人が詰め込まれた。

★孫娘：　キャロライン・アーチボルド（Carolyn Archibald）　29 歳

日本について祖父から悪口を聞いたことはない。こんな形で日本に来るとは思わなかった。祖父を誇りに思っている。話を聞いてもらったことに感謝している。

■ジョージ・ウィリアム・“ピーター”・ディクソン（Mr. George William“Peter” Dixon）　92 歳

70 年も経ち、ここにいる 4 人も数少ない生き残りだ。日本は今や世界で大切な役割を持っている。われわれとしては日本が極東に対して果たしていく役割に期待している。日本からいろいろなものを輸入しているし、関係は深い。

（註：ディクソンさんは、捕虜時代の話をあえてしませんでした。過去は忘れ、未来に向かいたいということで、かつて収容されていた善通寺と花岡の収容所跡訪問も希望せず、奈良を訪問しました）

★妻　レスリー・ディクソン（Lesley Dixon）　77 歳

彼から日本への恨みはひとことも聞いたことがない。戦争であったからと。彼は悪いものは収容所においてきたのではないか。帰還した捕虜の中では元気な方だと思う。2 人でいろいろな国へいってきた。旅行はもうおしまいだと思っていたが、こんな形でまた旅行できたことに感謝している。若い人たちには第二次世界大戦のような戦争がない社会で生き続けて行ってほしいと思う。

■アディ・グレン・ロックリフ（Mr. Adye　Glen Rockliff ）　91 歳

収容中に 18 か月病院にいた。栄養失調だった。タイではオーストラリア捕虜の 38%が死亡している。泰緬鉄道で食料不足から起こった病気にハッピーフィート（足がピリピリ痺れる）、皮膚病、神経疾患などがあり、自分はハッピーフィートを患った。脳障害による記憶力低下もあり、調節機能も失われたままである。元兵士の 90%が関節炎などの後遺症がある。

★娘 キャサリン・アン・タイ（Katharine Anne Tighe）　54 歳

父は軍隊にいた時のことを話さないので、捕虜だったとは思っていなかったが、身体に障害があり、捕虜だったと知るようになった。父には苦い思い出だ。しかし家では話さない。このお招きを受けて私もいろんなことを知る機会となった。

■アレキサンダー・ホワイト（Mr. Alexander White） 92 歳

泰緬鉄道で終戦を迎えた。ジャングルを 4 日間行進し続け、止まった所で宿泊した。通る所に穴があり、竹の丘を登って行かなければ進めなかった。黒水熱（マラリア）で 10 日間意識がなかったこともあったが、軍医に命を救われた。アドバーンという錠剤と点滴を投与して歩かせようとしたが、無理。症状の軽い人は労働させられた。解放された時、体重は 40 kg しかなかった。

★娘 クリスティン・ガイ・バーニー（Christine Gaye Bernie）

これまで父のこの体験を知ることはなかった。我々は父の若い時の体験を理解し、忘れてはならない。父の世代と同じような体験をしてはいけないと思う。

＊＊＊

６．QA タイム

参加者に事前に質問を書いていただき、休憩時間に事務局で整理、QA タイムにまとめて質問する形にしました。

Q1:パリットスローン事件について、実際にその現場を見たのか？

・（エドワーズ氏）戦闘後負傷した 125 人の豪兵と 30 人のインド兵が置き去りにされた。暮れになるころ、日本軍がやってきた。建物に集められた。助けてくれるかと思っていたら、灯油をかけて焼き殺した。3 名が脱出できた。現場から 40 メートルぐらい離れた道路の所から見えた。収容所で脱出したベラ少佐（？）やウォートンに会った。西村琢磨中将はこの件で死刑になったが、これは政治的な動きである。

Q2:花岡収容所にいた連合軍捕虜以外に他に中国人を見たか？

・（ディクソン氏）何名かの中国人がいたが、多くの女性（日本人か中国人か識別できないが）がおり、厳しい状況であった。

Q3：昭和天皇に戦争責任があると思うか？

・「NO」。君主という立場ではそのような責任を負うとは思わない。

・「NO」。当時天皇は戦争に反対していたと聞いている。

Q4：ベトナム戦争にオーストラリアは参加したがこれについてどう思うか。

・第 2 次大戦とベトナム戦争とは全く規模が違う。

・戦争については憎しみを持つ。

Q5：原爆の製造について事前に知っていたか。落されたと聞いた時の感想は？

・（エドワーズ氏）原爆製造のことは全く知らなかった。私は大浜収容所ではパン焼き職人として厨房で 400 人のパンを焼いていた。ドア越しに白い閃光を見たが、何が起きたか、その時はわからなかった。（註：山陽小野田市の大浜収容所から広島の閃光がみえるか否かについては、後に POW 研究会会員から疑義が出されている。）

Q6：泰緬鉄道にいた元捕虜へ、当時日本人と信頼関係を築くことはあったか？

・全くない。

・戦争が終わった朝（8 月 15 日？）日本人に戦争は終わるから少し待て、と云われ、いや待てない、

というような会話をしたのを覚えている。

Q7：アメリカの元捕虜と豪元捕虜を比べるとアメリカは怒りが強く、まだ怒っているように感じるが、どうか？

・彼らはヤンキーだから。（註：ここで豪捕虜がどっと沸いた）

・真珠湾攻撃の事もあり、怒りは強いのではないか。

Q8：廃線になっていた泰緬鉄道の再建計画についてタイとミャンマー両国が合意したというが、どう思うか？

・経済的に引き合わないのではないか。特に船舶業界の反対も多いのでは。

（他にも沢山の質問が出されていましたが、ここで時間切れとなりました。）

７．まとめ・閉会挨拶 内海愛子（ＰＯＷ研究会共同代表）

捕虜体験はオーストラリアという国を考えるうえで重要な問題。捕虜体験という共通体験を基に、戦後、オーストラリアの国家が形成された。アメリカの捕虜は怒っているという話があったが、3，40 年前、私がオーストラリアに行った時は、豪元捕虜たちから刺すような視線を受けた。日本の兵士は生きて捕虜になるなということを教えられてきた。この教えが捕虜の虐待と関係している。パリットスローン事件の戦犯裁判も捕虜の問題と関わっている。戦犯裁判で多くの日本人が処刑されたことが、捕虜問題の研究をしにくくしてきた。私達は捕虜研究のネットワークを作って活動してきた。若い世代も参加している。捕虜の問題は難しいし、微妙なところがあるが、話し合いを続けることに意味がある。この度遠路はるばる来て、証言をされたことにお礼を言いたい。また、お互いを理解するために、鋭い質問が出たのは嬉しい。交流ではこういうことを大切にしたい。

最後に参加者の記念撮影をして会を閉じました。

（高田ミネ）